

MBTI による印象形成に関する研究

1250532 森下 遥香

指導教員 日道俊之

研究背景・目的

近年、MBTI や 16personalities は若者を中心に流行し、印象形成や対人認知に影響を与えている。本研究では、MBTI 性格診断の結果が提示されることで、そのタイプに一致する行動や言動に注目しやすくなる現象を検討した。本研究では、血液型ステレオタイプに基づく先行研究を参考にし、MBTI 性格診断の情報が情報選択や印象形成に与える具体的な影響を明らかにすることを目的とした。

調査・分析方法

本研究では、MBTI や 16personalities が印象形成に与える影響を検討するため、195 名の 18～29 歳を対象に調査を実施した。参加者を INFP 群と ESTJ 群に分け、INFP 的特徴と ESTJ 的特徴を両方含む刺激人物の刺激文と MBTI タイプを提示した。刺激人物の MBTI が「INFP」と提示されたグループを INFP 群、「ESTJ」と提示されたグループを ESTJ 群とした。参加者には、刺激人物がどの程度各 MBTI にあてはまると感じたか、またその判断において刺激文のどの部分に着目したかを回答させた。さらに、形容詞対を用いた印象評価と MBTI 信念に関する質問を行った。データ分析は HAD を使用した。

分析結果

分析の結果、刺激人物が各 MBTI にどの程度あてはまると感じたか、その判断の際に着目した刺激文中の特徴に関しては有意な差が見られ、INFP 群でも ESTJ 群でも、ESTJ へのあてはまりや着目得点が高かった。また、印象の評定、MBTI 信念に関しては、INFP 群と ESTJ 群の条件間で有意な差はなく、偏りは見られなかった。

考察・結論

本研究では、MBTI 性格診断が印象形成に与える影響を検討した。結果、INFP 群・ESTJ 群いずれにおいても、事前に提示された MBTI 性格診断の情報により、印象形成は変化せず、血液型診断と比較して印象形成を大きく左右しない可能性が示唆された。一方で、刺激文の構成や初頭効果により ESTJ 的特徴への着目が偏った可能性がある。MBTI は現時点では日常的なステレオタイプとして定着しておらず、印象形成への影響は文化的浸透度や個人の認識次第で変化する余地がある。今後、刺激文の改良や参加者の事前知識の統制を行いながら、性格診断が印象形成に与える影響を慎重に検討し、その適切な活用方法を探る必要がある。